

目指す学校像  
明日の登校を  
楽しみに  
できる学校



自主・自律 敬愛 協働

# 鶴中だより

町田市立鶴川中学校 TEL 042-735-2405 FAX 042-735-2401

鶴川中学校だより

第11号

2024年12月24日発行

町田市立鶴川中学校

検索



## 子育ては難しい・・・

### — 配慮と比較は必要なのか —

校長 鈴木 英 顕

《今号は、保護者向けの内容でお届けいたします。明日、通常の学校だよりを発行いたします。》



かつて保護者会で、「自分のお子様を比べるのであれば、他人とではなく、過去の自分と今の自分を比べることがよい」というお話をしたことがあります。

今回の内容は、一見するとそれとは逆の話に聞こえるかもしれません。なかなか「子育てについて、かんたんに正解は見つからない。」ということなのです。

10月、ある小学校の運動会を見たときに感じるがありました。

運動会において、多くの学校で取り入れられている「タイム順(同じくらいのタイムの児童・生徒で走る)の徒競走は子どものためになっているのか。」ということです。

足の速い子と遅い子を一緒に走らせると、大きな差がついてしまうので、足の速さが同じくらいの子も同士で走らせるという、最近の運動会で一般的な「配慮」です。

ただ、この「配慮」は、失われる体験もあります。「足の速い子どもは『自分は足が速い』という自己規定をもちにくくなり、自己肯定感が高まりにくく、足の遅い子どもが『自分は走るのが苦手』という現実に触れる体験が薄まります。子どもたちが生きていく上で、「自分はどんな人間なのか」を認識できるように現実を提示することは大切であり、比較や競争を取り除くことが必ずしもよいとは言い切れないからです。

誰の目からも明らかな「差」を見せること、不快な感情を引き起こす「現実」に触れさせることが「可哀想だ」という意見をもつ人が多数いることも承知しております。しかし、子どもたちは確かな支えがあれば、自分の現実に向き合い、それを受け容れていく力を備えていると思います。そして、その経験を繰り返し、たくましく成長するのです。

思春期の集団になると何かしらの特徴を通じて、集団内の立ち位置を築いていきます。例えば、勉強ができる、足が速い、歌が上手、絵がうまい、友達に優しいなど、そういう特徴が子どもの立ち位置として機能します。

ここで避けられないのが比較や競争であり、思春期の子どもたちに周囲の大人がすべきこととして「比較や競争の場をなるべく増やすこと」なのかもしれません。受験勉強の合否だけ、運動能力だけ、テストの点数だけなど、比較や競争の場が少なすぎる場合、そこでの比較・競争に負けてしまうと、非常に傷つきが深くなってしまいます。

だからこそ、比較や競争の場を無数に提示することが大切になります。短距離が苦手でも、長距離なら輝ける子どももいます。また、教



科外の活動によって、通常の学校現場では見られない子どもの特徴が明らかになることもよくある話です。新体操が得意な子ども、メモを取るのが上手な子ども、普段はおとなしいけれど、音読に情緒を乗せるのが上手な子ども、さりげなく他の子をサポートするのが上手な子どもなどです。

こうした無数の場面から、大人たちが子どもの特徴を掴み、フィードバックすることで、子どもたちは「あれはダメだったけど、こっちはできる」という認識をもてます。ダメなことだけが提示されると傷つきが深くなりますが、無数の比較・競争の場があることで、うまくできない傷つきを支えるような体験に加えて、自分がうまくできる体験も積むことができます。

もちろん、比較や競争を通して直面する「現実」は、子どもたちにとって厳しいものもあります。だからこそ、大人の支えが求められます。本当の意味で子どもの支えになるのは、大切な人と「ネガティブな自分」を共有し、それでも自分の存在を認められるという体験の積み重ねです。すなわち、大人が子どもに用意すべきは、比較や競争の存在しない「無風地帯」ではなく、比較や競争がどんな結果になろうとも自分は受け容れてもらえるという「安全地帯」です。

あらゆる特徴をもった自分を「大切な存在」として受け容れられることで、子ども自身が「ネガティブな自分」を受け入れやすくなります。「自己受容」という言葉がありますが、この「自己」には、得意なこと、うまくできることだけではなく、人よりもうまくできないこと、苦手なこと、下手なことも含まれます。

本当に自信のある人とは、「ポジティブな自分」を主張する人のことではなく、「ネガティブな自分」も受け入れている人のことを言います。そして、「ネガティブな自分」も含めた自己受容ができる人に生じる心が、「人と比べる必要なんかない」「私は、私なのだから」となります。子どもたちがこの境地に近づけるような土台・環境を、今整えていくことが大切です。

それには、まず子どもとたくさん関わる必要があります。その際、子どもの「嫌だったこと」に耳を傾けることが、以前にも増して重要です。子どもたちは「楽しかったこと」「できたこと」は積極的に話しますが、否定的な出来事やそれに基づく感情は「聞かないと答えない」ということが普通です。

もちろん、大人が不安に駆られて「嫌なことはないの？」と聞くのではなく、「楽しかったこと」「できたこと」と同じレベルで「嫌だったこと」を聞くことが大切です。そして、その「ネガティブな感情」に共感的に耳を傾けることが最も重要です。

「共感」とは解決を試みようとするのではなく、そのときの感情に対して「それはそう思うよね」「嫌だったね」などのように気持ちを理解しようと努めることです。これによって、子どもたちの内側に「苦しさを理解してくれた人のイメージ」が残り、これが次の苦しい体験を支える力になります。

もちろん、子どもの苦手なところについて叱る必要は全くありません。むしろ、保護者自身も「自分も昔は、同じように苦手だったなあ」のように、保護者のできなかつたこと、失敗したことを積極的に伝えて、「うまくできないところがあっても生きていける」という姿を見せてあげることで子どもは安心できます。

そうすることで、子どもが自らの失敗やうまくできないことを話しやすい関係が生まれます。大人が子どもに向けて語るのは「武勇伝」ではなく、「失敗談」である方が好ましいのです。

もちろん、私たち教職員を含め、多くの人と協力・連携しながら子どもと関わっていくことが必要です。

社会に出て比べられることは、間違いなくあります。不要な「配慮」によって、社会に出て初めてネガティブな気持ちにさせたくはありません。

不得意なこと、失敗、全て、「らしさ」として受け止め、認められれば、必要な「配慮」と不要な「配慮」があり、「比べる」から「比べる意味はない」ということに気づくのだと思います。



\*いずれの写真も、文の内容とは関係がございません。